

翻 訳

人生という本の余白に書き込む（前4編）

— 『写在人生边上』 錢鐘書 著

張 新 力（訳）

鹿 又 玲 子（校正）

解題

錢鐘書（1910-1998）は無錫市出身で、1929年19歳で清華大学外国語系に入学、1933年卒業。1935年公費でイギリスに留学、二年後『17、18世紀英国文学の中の中国』と題した論文で副博士学位を取得。後、フランスのパリ大学でフランス文学を一年間勉強した。1938年帰国後、清華大学で教鞭を取り、翌年藍田師範学院英文系主任に着任し、1941年上海震旦女子文理学校で英語を教え、1945年上海暨南大学外文系教授を務める傍ら、南京中央図書館の『書林季刊』の編集にも携わった。1949年新中国成立後、再び清華大学に戻り、1953年文学研究所に移った。1966年文化大革命が勃発、錢鐘書は批判され、1969年11月に夫人とともに河南省の「5・7幹校」に下放された。1972年北京に戻り、1982年中国社会科学院副院長に就任した。

錢鐘書は多くの作品を残してくれた。1941-1949年の間の作品には古詩評論集『談芸錄』、散文集『写在人生边上』、短編小説集『人獣鬼』、長編小説『困城』があり、1949年以後は『宋詩選注』、『唐詩選』、『中国文学史』などの編纂に携わり、『管錐編』、『旧文四篇』、『談芸錄』（修正版）、『七綴集』などを出版した。そのうち、『困城』は邦訳され、中国では高校生読書の推薦図書に指定されている。

ここで翻訳したのは1941年に出版、1982年に『叢書』で再版された『写在人生边上』（訳：人生という本の余白に書き込む）である。この散文集は「悪魔の夜の錢鐘書先生宅訪問」をはじめとする十編からできている。今回発表したのは前半の4編である。

錢鐘書は1939年にこの本の完成に際して、次のような前書きを書いている。

「人生は一冊の分厚い本と言われている。

本当にそうなのであれば、大半の著者は書評家に過ぎない。書評家の本領を持って

いれば、多くの書を読まなくても、すでにもうたくさん書評を発表しているだろう。しかし、世にはもう一つのタイプの人がある。彼らが本を読む目的は別に書を批評したり紹介したりするためではない。彼らには退屈しのぎのような気軽さとゆとりがあり、のんびりとおおざっぱに目を通して。何か意見があるとき、事のついでに本の余白に書き込んだり、疑問符や感嘆符を書いたりする。中国の古本にある傍注や外国の本にあるMarginaliaのようである。それはあくまでもこまごまとした感想であって、本の結論ではない。その時その時の感想だから、前後に矛盾があったり、言いすぎたりすることがあるかもしれない。彼らはそれを別に気にはしていない。どうせ退屈しのぎだから、書評家が持つ、読者を指導し著者を教訓するような重大な使命はないのだ。誰が能力と忍耐力をもってそんなことをするだろうか。

もし人生が一冊の分厚い本だったら、下記の文章は人生のまわりの書き込みに過ぎない。この本は実に奥深い。

いつときで読み終わるものではない。書き込みを入れたところにもまだ多くの空白が残っている。」

この散文集は錢鐘書の魂、人生に対する思考がいたる所に溢れ出ている。氏の文学的力量、軽妙な筆致、哲学的心理学的な分析に感服し、その分析の多くは時代を超えて人々に啓発を与えられるだろうと思ひ、翻訳を試みたわけである。

キーワード：錢鐘書、人生、鬼の訪問、窓、快樂論、笑い

悪魔の夜の錢鐘書先生宅訪問

「本来ならば、あなたは私ととっくに知り合っていたはずだが」彼は言いながら、火鉢にもっとも近い席に腰をかけ、「私はつまり悪魔だ、あなたはかつて私に誘惑され、探りを入れられたことがある」と続けた。

「しかし、あなたは生真面目ないい人だね」と彼は言いながら同情するような笑みを浮かべた。「あなたは私のことを知らないはずだ。私に騙されたことがありながら、私に誘惑された時、私のことを可愛い女性、信頼できる友人だと信じ、追い求めるべき理想とさえ思って、私のことを見抜くことができなかった。私の誘惑を拒める人、例えて言えばイエス・キリストのような人でなければ、私が誰だか分らないのだ。今日はね、よほど縁があったのでしょう。ある家の祖先を祀る法事で、私が主賓として招待された。そこで夜半までつきあい、ちょっと飲みすぎたせいかな、酔眼朦朧、自分の暗い寓居に戻ろうとしたら、

思いもよらず、あなたの部屋に間違えて入ってしまった。人間界の電灯は実にひどいね。あなたの部屋も真っ暗で地獄の拙宅とかかわらないよ。しかも、私のところよりもっと寒い。私のところには一日中硫黄の火がついているからね。あなたのところは無理だね。石炭がまた値上がりしたって言うじゃないか。」

ここまで来て、私は驚きがやっとおさまり、主人の役割を務めなければと思った。そこで客人に向かい「貴方様の深夜のご来訪のおかげで、部屋中真っ暗になり、光栄の至りです。残念ながら私一人の浮き草暮らし、何の準備もしていません。申し訳ありません。貴方様がお寒いようでしたら、ちょっと失礼させていただき、メイドを呼び起こしてお茶でも入れてもらい、炭を足してもらいます」と、へりくだって言った。

「気を使わないでくれ」彼は遠慮がちに私を止めた。「すぐ帰るから。教えてあげようか」その時の彼は親しくて信頼できそうな、それでいて深刻そうな、まるで医者に自分の隠れていた病気を告白するような表情であった。「火に近づいても体が温まらないのだ。私が若い頃、天宮で大暴れをして、神様の席を奪い取ろうとして失敗し、氷の地獄に落とされた。^① あなたたち人間の世界にもあったような、ロシアの革命党がかつて暴君にシベリアの寒冷地に流されたと同じようなことさ。私の体に本来持っていた暖かさは寒気に抑えられ、心のなかに閉じこめられてしまい、結局、自分は中が温かくても冷血な者になってしまったのだ。私はかつて火の通った暖かいオンドルの上に三日三晩座ったことがある。それでも、お尻はやはり窓の外の冬夜と同じく、暗くて冷たかった。」

「バベドアレーイ (Barbey D'Aureville) もかつて言ったあの……、」と私は驚いて口をはさんだ。

「そのとおりだ」と彼は笑いながら続けて言った。「彼は『魔女記』(Les Diaboliques) 第5編の中で確かに火をもってしても温められない私のお尻のことについて触れた。ほら、有名になると厄介だね。有名になったら、秘密も何もなくなる。プライバシーまで聞かれ宣伝に使われるし、レポーターがそれを発表したりする。^② そうなれば、人の書こうとする自伝や懺悔録の資料を横取りしてしまうのだ。将来、もし私が自叙伝を書くとするならば、何か珍しい作り話でもしなければならなくなる。」

「それは自叙伝本来の意味に背くじゃないのですか？」私は聞いた。

彼はまた笑って言った。「意外だね。あなたの見識は平凡で、その平凡さは社説を書けるぐらいのものだね。今はもう新伝記文学の時代になっている。他人の伝記を作るのも自己を表現する方法の一つになっているし、自分の見解を入れても差し支えないし、他人をテーマに自分を表現するのさ。逆にいえば、自伝を書く人にはこれといって書くほどのこともない場合がしばしばある。そこで、自分自身のイメージをほしいままに描き出し、その結果、最も身近な妻や息子でさえ見分けられない程の自分像になってしまう。また、交

友や他人の逸話を無理に書きこんだりする。だから、あなたがある人のことを知ろうと思ったら、その人が他人のために書いた自伝を読めばいい。自伝はつまり別伝だから。」

それを聞いて思わず感心してしまった。そして、「貴方様の今のお話を将来私に引用させていただきますか」とうやうやしく尋ねた。

「別にいけないことはないだろう。ただ、あなたが引用するときに、『僕の友人の某々が言った』と公式に書くべきだ。」と彼は答えた。

私は更にうれしくなった。そこで謙遜して「貴方様は本当にこの私を取り立てて下さいました。ということは、私は貴方様の友人になる資格があるということなののでしょうか？」私は言った。

彼の答えは私をかなりがっかりさせた。「別にあなたのことを取り立てたわけではない。あなたを私の友人と言ったのは、あなたが私を接待し、自分の友人と言ったからだ。文章を書くとき、古人の言葉を引用するのにことさら引用符をつけずに自分の言葉を使っているとさせるときがあるが、現代人の言葉を引用する場合には、かならず『私の友人』を付け加える。こうすれば、あなたは友人をたくさんかき集めることができるのだ。」

彼は率直にものを言った。にもかかわらず、私はやはりお座なりであった。「おかげでいぶん勉強になりました。貴方様が文学の創作方法にもこんなに精通されているとは意外でした。さっき、貴方様が『魔女記』の話をされたとき、私はすでに感心していましたが。」

彼は半ば哀れむような口調で言った。「どうりで、皆があなたを自らの階級意識から抜け出ることができないと言っているはずだ。私には本を読む資格がないとでも言っているのかい。私は地獄という社会の最底辺にいるけれども、小さいときから向上心が強く、本などを熱心に読んでいた。特に流行の雑誌や小冊子の類のものをね。だからゲーテが私を進歩する精神を持っていて、新聞紙上にある「時代の流れ」とともに前進できると称賛している^③。文学の好きなあなたと話しているのだから、私は話の中に文学の名著を入れたのだ。私もあなたと同じような趣味を持ち、いかにも素人じゃないと見えるように。逆に、もしあなたが本を読むのが嫌いな多産な作家だったら、私も当然話の内容を変えなければならない。たとえば、自分の書いた本以外のものを読む必要はまったくない、人生は短いのだ、古書を読む暇なんてどこにある、とね。それに、私は科学者に発明を、歴史学者に考古を、政治家に国際情勢を、展覧会では芸術鑑賞を、宴会では調理技術を、話すことができる。それだけではなく、時にはわざと科学者に政治を、考古学者に文芸を話す。どうせ、彼らは何も分からないから。彼らに話のネタを少し提供するのも面白いではないか。どんなに役に立つ話でも馬の耳に念仏ってことさ。調理の話は、いつも茶会に持ち出すのだ。私の話に興味を感じた主婦が後日私に彼女の手料理をご馳走してくれるかもしれない。このように何万年間も世を渡ってきて、人間界でもやや有名になった。私のことを、ダンテ

は思弁に長けていると言ひ、ゲーテは見識が広いと称賛している^④。あなたが私の地位にまで達したら、きっと驕り高ぶるだろう。だが私は違う。ますます謙虚になり、時には『私は地下鬼にすぎない』^⑤とへりくだる。まるであなたたち人間が『田舎者』と謙遜するように。私は口だけでは自分の謙虚さを十分に表現できないことを心配して、自分の体を謙虚の象徴にするのである。お金持ちは袋のような大きい腹を持ち、中にいっぱい物が入っているかのように見せる。思想家は頭をたれ、腰を曲げ、まるで疑問符のような体形をして、すべてのことに疑問を持っているように見せる。だから……」と彼は話しながら右足を持ち上げ私に見せた。革靴のヒールが格別に高かった……「私の足はいささか不自由ではあるが、これは謙虚のシンボルである。不器用なのだ。すると、私は纏足とハイヒールを発明した。私の疾患も時には隠す必要があるからだ。特に女の人に変身するときにはね。」^⑥

「貴方様の風貌をご覧になった方がいて、彼らの話によると、あなた様には鋭い角がついていて、まるで……」と私はこらえきれずに聞いた。

彼は私が話し終わるのを待たずに答えた。「そうだ。私は牛の格好をするときもある。^⑦これも当然ある種の象徴なのだ。牛はいつも犠牲にされる、だから、『私が地獄に行かなければ、誰が行くの』という精神を見せつけるのだ。人間は大風呂敷を広げるのが好きだが、牛はそんなことをしない。少なくとも生理的にそうすることを許されていない。だから、牛の格好をすることは、まさに謙遜の表現なのだ。あなたたち文人は見せかけの遠慮が得意だが、私にはできない。一部の人は得意満面に、人のお世辞を遠慮もせずに当たり前のように受け入れる、まるで借金を返しても、先方から利息もつけてくれないと、恨み言を言うようなものだ。また一部の人は謙虚であるように見せ掛け、人に褒められれば口先では恐縮ですとはいうものの、内心、上司がもらった賄賂が少ないとつき返し、倍になって戻ってくるのを待つようなものである。債権者であれ、上司であれ、彼らは世の中にはまだ称賛すべき良い人が存在していると信じているし、それは少なくとも彼ら自身のことだと思っている。私の謙虚さをもっとも徹底的なものだ。私には驕るべきところもなく、称賛する価値もないものだと思っている。他の人に至ってはなおさらだ。私はずっと人々に呪い罵られているから、ああいう虚栄心がぜんぜんない。けれども、私は作者ではないが、作品をたくさんもたらしている。この点においては、私はまるで……」と、彼はちっとも恥づかしがる様子もなしに言った。ただ火鉢のなかの真っ赤に燃えた炭が彼の顔をテカテカと光らせていた。「私はまるで美しい女性のように、自分は書けないけれど、多くの失恋詩人にインスピレーションを与えることができる。彼らの破れた心から、いや、破れた喉から歌と詩を生み出させている。バイロンやシェリーなどの詩が私の影響を受けていた^⑧。また、今の新聞や雑誌にも悪魔でしか発せない話ばかりが並べられているのも私の感化を

受けたからよ。」

「不思議に思っているのですが、世界中の新聞が戦争の話をしている今、貴方様はどうして持ち前の虐殺や侵略などの破壊的芸術性を発揮せず、忙中閑を盗んで、こんなところで雑談しているのですか」私は聞いた。

「あなたは客を早く追い返そうとしている。そうでしょう。確かに私はもう行かなければならない。夜はあなたたち人間世界では休息の時間だということをつっかり忘れていた。今日、思う存分に話したが、もう少し説明したいことがある。私が戦争に関与している、とあなたは言っているが、それは誤解だ。私の性格は穏和で、武力の使用をもっとも反対しているし、条約がすべての問題を解決してくれると信じている。たとえば、ファウストが私と血を口に塗り同盟を結び、魂を売る契約をした。^⑨ 双方ともなんと上品なことだろう。私は当初威勢を張って戦うのが好きだったが、造反に失敗して、天国から追放された後、相談役の話聞いて悟った。力を競うより知恵を競ったほうが良いとね。それ以後、私は戦いの代わりに誘惑という手を使うようになった。ご存じのように、私は魂を売る商売している。人類の魂は一部は神様によって選ばれるが、残りの全部は私の管轄下にある。思いもよらず、ここ数十年景気が悪くて、商売にならず、食っていけないのだ。人類の魂には善し悪しがある。良い魂は神様が保存しておくが、悪い魂は私が商売に出す。19世紀の半ばごろ突然変動が起こり、ごくわずかな人以外、人類には魂がまったくなくなってしまった。わずかにある魂も良いものだから神様がそれを持って行かれる。たとえば、戦士には魂がある。しかし、彼らの魂は直接天国に行き、私のところには何も回ってこないのさ。近代心理学者は『魂のない心理学』を提唱している。この学説はみんなが魂を持っていた古代には絶対あり得ない。今の時代、たとえ神様に選び残された魂があっても、汚くて臭いものばかり、実験室の薬の臭いがするものでなければ、古本のほこりをかぶっているもので、またそうでもないとすれば鼻をつく銅銭の悪臭を帯びているものである。私は潔癖症だから、そういうゴミ拾いようなことはしたくないのだ。もちろん近代にも悪者はいる。彼らには魂も人格もなく、無機物のように無表情で感情を外に出さず、機械のように能率が高い。詩人の類も私をがっかりさせている。彼らはいつも魂を表現すると言っている。魂を全部晒し出してしまっ、ちっとも私に残してくれない。私が忙しいですって、暇でたまらないのよ。私も近代物質と機械文明の犠牲品で、一人の失業者だ。しかも、私には経済的負担がのしかかっている。七百万人の子孫が私の養育を待っているから^⑩。付き合いはまだあるよ。私のような名声と人望のある人には付き合いがないということはまずない。今日もご馳走になってきた。今の時代に奢ってくれる人がいないという心配はいらない。ただ能力で飯を稼ぐことをさせてくれないので、悩むよね。」彼は言った。

彼は黙り込んだ。彼の寂しさが部屋中に広がり、火鉢の暖かさまで下げてしまっていた。

私が自分の魂のことを尋ねようと思ったとき、彼は突然立ち上がり、もうそろそろ行かなければ、と言った。そして「お休み」と言った後に、また会えるかもしれないと付け加えた。私はドアを開けて見送った。果てしのない夜が彼を静かに待っている。彼は部屋を出て、夜の暗闇に吸い込まれるように消えて行った。まるで一滴の雨水が海に帰っていくように。

注釈

- ① ミルトン《失樂園》第一巻悪魔が反逆により天国で大暴れして貶められる。ダンテ《地獄篇》第二十四、悪魔氷攻めの目にあう。
- ② カールソン・温ハンガリー共著の《魔鬼》(Garçon & Vinchon: Le Diable) 中に悪魔についての民間伝説が集められている。
- ③ ゲーテ《ファウスト》第1部巫童節、巫女悪魔の変身をいぶかる。悪魔答えて曰く。世界文明は日進月歩、ゆえに我もまた共に進歩している。
- ④ 《地獄篇》第二十七、悪魔自ら論理学者と名乗る。《ファウスト》第1部《書房節》悪魔自ら言う。知らないものはない。従って、見聞も広く博識である。
- ⑤ コールリッジ《魔鬼有所思》、サンパウロサイ《魔鬼閑行》2篇の詩に悪魔は謙虚さをもって、傲慢さを覆い隠す。
- ⑥ 悪魔は足に障害がある。ルサージュ (Lesage)《魔鬼領導観光記》(Le Diable Boiteux) による。又、デフォー (Defoe)《魔鬼政治史》(Political History of the Devil) 第2部第四章による。
- ⑦ 悪魔は牛の形をしている。《旧約聖書・詩篇》第十六篇 鬼を祭るものは牛像を作りこれを拝む。後に悪魔は山羊の形をして現れる。デフォーこれを詳しく述べている。
- ⑧ サンパウロサイ《審判の夢》(A Vision of Judgment) 長編詩の中で、バイロンやシェリーは悪魔は詩人であると言っている。
- ⑨ マーロウ (Marlowe)《ファウスト》(Faustus) にファウスト腕を刺して血を出し、盟約する。とある。
- ⑩ 《失樂園》第2巻、(1) ヴェイユ《魔鬼威靈記》(Johann Weier: De Praestigiis Daemonium) 小鬼は全部で七百四十万五千九百二十六匹。

窓

また春が巡ってきて、時々窓を開けることが出来るようになった。春は窓から入って来る。部屋の中で人はじっとしていられず外に出かける。しかし、家の外の春はまだまだお粗末なものだ。至る所日の光に溢れていても部屋の奥の暗がりを射し込んだ光ほどの明るさはない。至る所に日の光に暖められて物憂げな風が吹いているが、部屋の中のどんよりした空気をかき乱せるような活気がない。それならば鳥の囀りは……これもまた声かただどしくひ弱い。部屋の中の静けさでもって際立たせる必要があるようだ。これで分かつ

た。春は窓に嵌めて見るべきものだ。あたかも絵画に額縁を嵌めるように。

と同時に、我々はドアと窓はそれぞれ異なった意味を持っていることに気づく。当然、ドアは人の出入りのために作られたものであるが、窓も時には出入りに使われることもある。例えば、こそ泥や小説の中に出てくる人目を忍んで逢引を重ねる人も窓からの出入りが好きらしい。だから、窓とドアの根本的な区別は決して人が出入りするかしないかで決められるものではない。もし、春を愛でるということから見ると、こうも言えるかもしれない。ドアがあるから、我々は外に出て行くことができ、窓があるから、我々は外に出て行かなくても良いのである、と。窓は人間と大自然の間の隔たりを取り除き、風と太陽を誘い込んで部屋の中に春の息吹を閉じ込める。そのお陰で我々は部屋の中でゆったりと春を楽しむことができ、もう外へ探しに行く必要もない。古代の詩人陶淵明も窓のこの様な意気をかなり納得していたようである。『帰去来の辞』には「南窓に倚りて以て傲を寄す、膝を容るるの安んじ易きを審らかにす」と言う句がある。つまり、遠くを眺められる窓さえあれば、たとえ粗末な小さな家でも住む事ができるのではないだろうか。また彼は「夏の夜、徒然なるままに月を愛で、北窓の下で安らかに伏せば、涼風肌に心地よく、さながら羲皇になりたる心地す」と言っている。つまり、窓からの風さえあれば、賤が家でも極楽の世界になりうるということである。彼は柴桑の人であり、廬山が近くにあるから、わざわざ避暑に行く必要もない。だから、ドアは我々に探究心を起こさせ、欲望を表し、窓は我々に支配を許してくれ、楽しみを表す。この区別は部屋に住んでいる人の考え方ばかりでなく、時には外から来る人にも通用する。ある外来者がドアをノックして入って来る。何か用があり、何か尋ねたいことがある。彼はあくまでもお客にすぎず、すべては主人が出て来てから決める。逆に言えば、窓から潜り込んで来る者は、こそ泥であろうと、逢引の相手であろうと、主人の歓迎と拒絶をも顧みず、自分がこの家の臨時の主人だとすでに心に決めているのである。ミュッセ (Musset) の『乙女らは何を夢見るか』(À Quoi rêvent les jeune filles) という詩劇の中に実に面白いところがある。かいつまんで言えば、父親はドアを開けて、物質的な夫 (matriel poux) を招き入れるが、理想の愛人 (idal) はいつも窓から出入りする。言い換えれば、玄関から入ってくるのは形式上の娘婿にすぎず、岳父に気に入られたとはいえ、まだ娘の心を捉えたわけではない。しかし、裏窓から入ってくる者はこの家の娘が身も心もすべて託した本当の愛人である。玄関から入る時には、先ず門番に告げ、主人が出てくるのを待たねばならない。それから挨拶があつて来意を告げる。気を使わなければならないし、時間もかかる。裏窓から入ったほうが手取り早く楽ではないか。学問をするときの近道と同じようなものだ。本の後ろの索引を気にしながら本文から読み始めれば、ますます遠いものを感じてしまう。もちろん、ドアと窓のこういった区別は正常な社会状況の下でのことであり、戦争などの非常事態になれば、家自体

が無事でなくなるから、ドアや窓を論じている場合ではない。

世の中にドアのない家はない。しかし、窓の開かない家がある。これは窓がドアに比べ人類の更なる進化を象徴しているといえる。ドアはこの家に住む人にとって必要不可欠なものであるが、窓の多少は一種の贅沢なのだ。家はもともと鳥や獣の罠と同じく人が帰ってきて夜を過ごす為のもので、ドアを閉めれば身の安全が保てる。しかし、壁に開けた窓は光と空気を取り込んで、我々を昼間でも屋外に行かなくてもよくし、ドアを閉めたままでも生活できる。窓のお陰で家が人生に色々な意義を添えてくれた。家は雨風を防ぎ、夜を過ごす場所だけではなく、装飾をしたり、書画を掛けたりして我々が一日中思索や仕事、趣味を楽しみ、人生の悲劇や喜劇を演ずる場所となっている。

ドアが人間の出入り口なら、窓は自然の出入り口であると言える。家はもともと人間が自然の脅威から身を守るために造ったものである。ゆえに、四方には壁があり、屋根がある。窓は一筋の自然を取り込み、それを環境に馴染ませて利用する。まるで、野生の馬を飼い馴らすように。それ以来、我々は家の中で自然に触れることができ、光を探し新鮮な空気を求めに行く必要がなくなった。光と空気の方が自ら我々の所に来てくれるのである。だから、窓も又、人間の自然に対する勝利の一つである。ただ、この勝利は女性の男性に対する勝利の如き、表面上は譲歩したように見えるが一人間が窓を開け風と光に支配させる。支配しに来たものがこの場所に居座ってしまうとは、誰が想像したであろうか。前にも言ったように、ドアは必要不可欠なものである。その必要は人の意思に左右されるものではない。私を例にとっても、空腹になれば食べねばならないし、喉が渴けば飲まなければならない。だから、誰かがドアをノックしたら、必ず開けに行かなければならない。もしかしたらイプセンの言うような、あなたより若い世代の若者が入ってくるかもしれないし、ドークインシーが『謀殺の後にドアをノックする音を聞いた』(On the knocking at the Gate in Macbeth) の中に書いているように、白昼の世界が暗闇の世界を攻めようとしているのかもしれない。また、放蕩息子が帰って来たのかも知れないし、誰かが金を借りに来たのかもしれない(借金取りの可能性もある)。来た人の意図を知らなければ知らないほど、ドアを開けるのが怖い。わけを知りたければ知りたいほど開けたくなる。毎日来る郵便配達員のノックでさえ希望の中に不安が混じる。受け取るまでは知らないでいるその消息を知りたいからである。ドアの開け閉めは意のままにはいかないが、窓はどうだろう。朝起きてカーテンをサッと開けさえすれば、窓の外の何があなたに声をかけているかわかる。雪か、霧か、雨か、それともお日様か、これらが窓を開けるかどうかを決める。以前、窓は贅沢品だと言った。贅沢品はもともと人間が状況を判断して増減を酌量するものである。

窓は家の眼だと私はいつも思う。劉熙が『釈名』に「窓は聡なり、中から外を窺き、聡

明なり」, ケラーが『晩歌』(Abendlied)の書き出しに「二つの瞳は小窓の如し, 絶景をありありと収む」と言っているが, どちらも何か物足りない。眼は心の窓である。我々は眼で世の中を見, 同時に人に自分の心の内を見せる。眼は常に心に従って動く。孟子は「人を見るには瞳を見るのが一番だ」と思っていた。メーテルリンクの戯曲の中に, 恋人同士が接吻する時, 眼を閉じてはいけない, とあるのは, 相手が唇にどれだけ心を込めているかが見えるからである。我々が黒いサングラスを掛けている人と話すとき, 相手の気持ちがあつかめず, まるでお面を被っている人に対するような感覚がするのは, このゆえである。エッカーマン (Eckermann) の記した1830年4月5日のゲーテとの談話によれば, ゲーテは眼鏡を掛けている人すべてが大嫌いだった。その人の顔の皺まではっきり見えるのに, レンズで眼がちらちらして, その人の心の状態が見えないと言うのだ。窓は中の人を外を眺めるのを許すと同時に, 外の人の中を覗くことも許している。だから, 賑やかな所に住んでいる人はカーテンが必要となり, それでプライバシーを守るのである。夜間に人の家を訪問したとき, 窓に明かりが点いていないのを見ただけで, この家の主人が留守だと推測でき, わざわざドアをロックする必要がなくなる。まるで, 相手が何も言わなくても, 彼の眼から何を考えているかが分かるのと同じである。窓を閉めることは眼を閉じるのに等しい。天と地の間にある多くの景色は眼を閉じて初めて見えるのである。例えば夢である。もしも, 窓の外が人の声や物音で騒々しいならば, 窓を閉めて魂を美しい景色や風物の中で自由に散策させたり, 静かに瞑想すればよい。時には, 窓を閉めることは眼を閉じる事と関連する。窓の外の世界がたいしたものではなく, ことさら満足させてもくれないならば, 故郷に帰りたいと思ひ, 離れて久しい親戚や友達に逢いたくなれば, 寝るしかない。眼を閉じて夢の中でそれらを探し求める。そこで, まず窓を閉めねばならない。春とはいえ, まだ寒さが残っている。いつまでも窓を開けっ放しにしてはいけないから。

快樂論

古本屋からビニー (Vigny) の『詩人日記』(Journal d'un pote)を買ってきた。さりげなく開いたら, 面白い文が眼に飛び込んできた。フランス語の中では喜楽 (bonheur) という名詞は「良い」と「時間」の組み合わせでできている, と彼は指摘している。「好事魔多し」といっても時間の遊びに過ぎないということだろう (Si le bonheur n'tait qu'une bonne denie!). 我が国にも同じ深い意味を持つ言葉もあることを連想させられる。たとえば, 快活あるいは快樂の快という字は, 人生にとってすべての楽しいことは流れていきやすく, 引き留め難いことを明らかに示したものである。だから, 我々は「歓楽の夜は短い」

と感嘆する。人間は楽しいときは時間の経つのを早く感じ、困苦と退屈のときは時間が足の不自由な人のように、歩みがとても遅いのである。沈鬱という詞はドイツ語では「長時間」(langweile)の直訳である。『西遊記』の中で子猿が悟空に「天国の一日は地上の一年」と言った。こういう類の神話は確かに民間の心理を反映している。天国は下界より快適で歡樂的なので、神様のところでは光陰は矢の如く速く過ぎ去っていく。下界の一年はそこではただの一日に過ぎない。そういうふうに類推すれば、地獄は人間世界より更に苦しいから、一日はもっと長く感じるだろう。段成式が『西陽雜俎』の中で次のように書いている。「鬼の言う三年は人間の三日間である。」人生が短いと愚痴る人はもっとも幸せな人である。逆に言えば、本当に幸せな人は何歳まで生きても、その死が夭折だと言うしかない。だから、神様になってもたいしたことはない。地上で30年間生きた人間でも天国ではたった一カ月未満の赤ちゃんに過ぎない。このような「天算」には都合の良いところがある。たとえば、戴君孚の『広異記』には次のことが載っている。崔参君が妖狐を捕まえ、「桃枝で五回叩く」と決めたが、初孫の無忌が軽すぎると言った。崔が「五回は人間の五百回に相当するから、決して軽い刑ではない」と答えた。こうして見れば、年寄り風を吹かせて誕生日を祝ってもらうのは地上でやるのがもっとも適宜であり、刑罰なら天国で受けたほうが良いということになる。

「永遠快樂」という言葉は実現不可能だけではなく、荒唐無稽で成立しない。速く過ぎてしまうものは永久にはなりえない。「永遠快樂」というわれわれは、あたかも四角い円形や静止の動きと言うようなもので自己矛盾するのである。楽しいとき、瞬く間に過ぎ去る時間に向かって「ちょっと止まって、あなたが美しすぎるから」と叫んでも無駄である。永久を求めるなら、苦痛のところに行くべきだろう。多くを語るまでもなく、眠れない夜、または約束した人を待っている午後、あるいはつまらない授業を聞いているとき—これらは宗教信仰よりも更に効果的に、何が「永久」というかを実際に体験させてくれる。人生のトゲはこれである。つまり、しぶしぶ留まって過ぎ去ろうとしないのはいつもあなたが愛着を感じないものばかりである。

快樂は人生の中で、子供に菓を飲ませるときに与える飴、または、犬レース場で犬を走らせるための電気ウサギのようだ。数分間、あるいは何日間の快樂がわれわれに一生を生きさせ、たくさんの苦痛を我慢させている。快樂が来ることを希望し、快樂が留まってくれることを希望し、また訪れることを希望する、この三つが人類の努力史を概括している。われわれが追い求め、そして、待っている間に月日は知らず知らずにこっそりと過ぎ去っていく。われわれはただ時間を消費する道具かもしれない。一生を生きたとしても、その歳月のための副葬品になっていたに過ぎず、到底快樂を楽しめないのである。しかし、我々は死ぬまで自分が騙されたと分からずに、死後天国が待っていると期待している。そして

そこで神様に感謝し、また、その日に我々はやっとう永遠の快樂を楽しめるのである。御覽なさい。快樂の誘惑は電気ウサギや飴のように、われわれに人生を我慢させただけではなく、釣竿につけた餌のように、われわれに死を甘んじて受け入れさせる方向へ導くのである。こうして見れば、人生は苦痛だけれど、悲觀的ではない。それは快樂の希望を持っているから。今のかけは将来支払う。快樂のために死を遅らせることさえ願っている。

ミルは「苦痛のソクラテス」と「快樂な豚」を比較したことがある。もし豚がほんとうに快樂を知っているならば、もうソクラテスとたいした違いはないだろう。豚は人間のようには快樂を楽しむことができるかどうかは良く分からない。しかし、人間は豚のようにも簡単に満足できることを良く見かける。快樂を肉体と精神に分けて分析するのはもっとも愚かなやり方なのだ。快樂的な享受は、その快樂の原因が肉体に物質的な刺激を受けたにもかかわらず、すべて精神的なものである。生まれたばかりの赤ちゃんはお腹がいっぱいになるとおとなしく寝る。体が快適に感じていても快樂とは何かはまだ分からない。赤ちゃんには精神と肉体はまだ分化しておらず、星雲のような混沌状態にあるからである。お風呂に入り、花を賞で、ご飯を食べる。もしこれらのことに快樂を覚えるなら、それは決して体をきれいに洗い、花がきれいに咲き、食事が口に合うからではなく、概して心に心配する事がなく、リラックスした魂が肉体的な感覚に専心できるし、そして楽しみ、鑑賞するからだ。もし精神的に不快なとき、例えば、離別前の宴会では、どんなに見事な料理でも、口に入れれば野暮ったく、砂を噛むような味気ないものを感じてしまう。そのときの魂は眼疾にかかった眼が光を恐れているような、傷口が空気に触れたくないようなものだ、空気と光は有益なものにもかかわらず。快樂を感じたときのあなたはきっと心に恥ずべきことがないのだろう。もし、あなたが罪を犯したことに本当の快樂を感じていたなら、あなたはきっと道德者、修養のある者と同じような心持でなんら後ろめたさを感じることなく、悠然としているだろう。もっとも潔白な良心を有していることと、まったく良心がない、あるいは真っ黒な良心を有することとは効果が同じである。

快樂が精神によって決められることを発見したことで、人類がまた一步進歩した。この道理の発見は是非、善悪は公理によって決められ、暴力によって決めるものではない、という事と同様に重要である。公理の発見後、世には武力に完全に屈服する人がいなくなった。精神が快樂の根源だと気付いた後、苦痛はその恐さを失墜させ、肉体の専制も軽くなった。精神的鍊金術は肉体の苦痛のすべてを快樂の材料に変えていく。そこで、家が火事にあっても祝う人もいれば、一汁一菜の清貧な生活をしていても、樂觀さを保てる人もいる。また、幾多の災難を前にいつものように談笑する人もいる。だから、前に言ったように、人生は快樂でなくても樂觀的に生きることができる。『先知書』を書いたソロモンから『海風』の詩集を出したマラメルに至るまで、文明人の苦痛は身体の倦怠によるものだと

ている。しかし、一方的に苦痛の中から楽しさを探し、病気から快楽を濾過してまで出す人がいて、健康を失った体にある種の償いを与えている。蘇東坡の詩には「病気のお陰で閑が得られ、安心より良い処方がない」というのがあり、王丹麓の『今世説』も次のことを記録している。毛稚黄が病弱で、人々が心配していたが、毛は「病気の味はそう悪くない。心霊の安寧を求めるなら、病魔は私にどうすることも出来ない」と言った。体育を重視する西洋にも同じような達観的な人を見つけることができる。心配性で多病なノバーリス (Novalis) が『碎金集』に病気哲学を立て、病気は「人に休みを教える女教師」であると言った。ローデンバック (Rodenbach) は詩集『禁錮した生活』(Les Vies Encloses) の中でもつばら病気を詠う巻があり、病気が「靈魂を洗い清める」(puration) と書いた。体が丈夫で、活動の好きな人たちはこの観点に賛同し、病気の苦痛から一種の妙味を覚えた。十八世紀ドイツの頑健で逞しい詩人 Brockes (B.H. Brockes) が初めて病気にかかったとき「驚くべき大発見 (Eine bewunderungs würdige Erfindung)」だと思った。こういう人たちにとって、人生に脅威を与えるものはもうないだろう。このような快楽は忍耐を享受としたもので、精神の物質に対する最大の勝利である。魂は自主できるもの—と同時に自らを欺くものである。一貫してこういった態度を抱ける人間は当然大哲学者である。しかし、彼は大馬鹿でもあるかもしれない。

その通りである。確かにちょっと矛盾がある。矛盾は知恵の代価である。これは人生の人生観に対するイタズラである。

笑いを語る

文学がユーモアを提唱して以来、笑いを売るのが文人の職業となった。ユーモアはもちろん笑いで表現するが、笑いは必ずしもユーモアを表わすとは限らない。劉継庄の『広陽雑記』に「ロバの鳴き声は泣きに似て、馬の鳴き声は笑いの如き」と書いてある。しかし、馬はユーモアの名人ではない。顔が長すぎる由縁だろう。実を言うと、一部の人の笑いは馬の鳴き声のように、ユーモラスにはなりえない。

ユーモアを持っているか否かで人間と動物を区別するのはアリストテレスが第一人者のようである。彼は『動物学』の中で「人間は唯一笑いのできる動物だ」と言っている。近代の奇人ブラント (W.S. Blunt) が『笑と死』の十四行詩を書き、自然界の鳥獣が喜怒哀愛惧のとき、声を出さないものはない。ただ、ユーモアを表示する笑い声には欠けている。しかし、もし笑いがユーモアを表現するためのものなら、その笑いは廃品か奢侈品の類に入る。人類は必ずしも皆笑いを必要とするとは言えない。鳥獣の鳴き声は人間の一般の感

情を表わすのに十分である。ライオンは怒るとほえる。猿は悲しくなると啼く。蛙は争うと騒ぐ。敵に会うと犬のように吠え、愛人に会うと鳩が雌鳥を呼ぶような声をだす。ユーモアを笑いで表現しなければならぬ人間は幾人いるか聞いてみたい。神様は笑う能力を人類に公平に分け与えた。顔は笑顔ができるし、喉からは笑い声が出せる。これらの本領を持っていて使わないのは本当にもったいない。だから、普通の人はユーモラスだから笑っているのではなく、笑えるから、その笑いを借りてユーモアのなさを隠しているのである。笑い本来の意味が徐々に喪失している。本来はユーモアの流露なのに、徐々にユーモアのなさを包み隠すものとなった。そこで、痴呆者の笑い、視覚障害者の笑い—それに流行のユーモア文学が目に入ってくる。

笑いはもっとも流動的で、もっとも迅速な表情が、眼から口角まで広がる。東方朔が『神異経・東荒経』に東王公が壺を投げて当たらず「天がそれを笑った」と記載してある。張華は「天笑」とは稲妻であると解釈している。誠に見事な想像だ。オランダ夫人 (Lady Holland) の『追憶録』によると、シデニー・スミス (Sidney Smith) も「稲妻は天のしゃれ (Wit)」だと言った。笑いは確かに人間の顔の稲妻だと言える。眼が突然明るくなり、唇の間に歯が光る。我々は稲妻を取り押さえ、太陽と月の替わりにすることはできない。だから、我々は笑いを固定的、集団的表情に変えることもできない。提唱により発生したユーモアはきつと不自然な振る舞いになる。こういった機械化された笑顔はドクロが歯をむき出したようなもので、生き生きとした人間の姿ではない。ベルクソンが『笑論』(Le Rire) の中で、すべての可笑しさは活発な事物が硬直し、生き生きとした振る舞いが機械的 (Le mécanique plaque sur Le vivant) になってしまったことによるものである。だから、同じ言葉の繰り返し、吃音や口癖、子供が大人の真似をするようなことなど、みな人を笑わせるのである。お年寄りが青年より可笑しいことが多いのも、年寄りは青年ほど機敏でなくなり、相も変らぬ慣習の連続に過ぎないからである。というわけでユーモアは提唱できないものである。提唱となると、自然の流露も模倣となり、変化に富んだものも型にはまってしまう。このようなユーモアはそれ自体がユーモアの材料であって、このような笑いはそれ自体が可笑しい。本当にユーモアのある人は他人の暗黙の了解が得られるし、欣然と独り笑いができ、冷然とほほ笑むこともできる。それによって、重苦しい生活に一息入れるのである。ひょっとしたら、何百年後何万キロ離れたどこかでやっとな誰かが彼と時間と空間の隔たりを持ったまま意気投合し、向い合って笑うのかもしれない。もしも大勢の人が同じ時刻に一斉に口を開けて大笑いをしていたら、それはしよせん下等な遊戯所の漫才大会に過ぎない。国産品の提唱で偽物が増えたことさえあったから、量産できないユーモアはなおさらである。だから、ユーモアが提唱された後、ユーモア家が生まれたわけではなく、ただ顔に限取りをしたピエロが増えただけだった。ユーモアの看板掲げる

と、ピエロの地位も急に高くなり、彼らは劇場から抜け出し、文壇にまぎれ込む。逆に言えば、隈取りのピエロが看板を掲げると、ユーモアの品格が下がり、その大半はせいぜい遊芸に過ぎなくなる。間違いなくピエロも人を笑わせる。しかし、それはユーモラスな人とは全然違う。本当にユーモアのある人は笑えるし、我々は彼に続いて笑うのであるが、似て非なるユーモアのあるピエロが可笑的だから、我々は彼を笑うのである。ピエロが我々を笑わせるのは、彼にユーモアがあるからではなく、我々自身がユーモアのセンスを持っているからである。

だから、ユーモラスはせいぜい一種の性格で、決して主張として標榜してはいけないし、職業にするにはなおさらいけない。ラテン語におけるユーモア (Humour) の本来の意味は液体であることを忘れてはいけない。言い換えれば、ユーモアはまるで賈宝玉が心の中で想像する女のように、水でできている。ユーモアを一貫の主義とし、あるいは一生の仕事とすることは、液体を固体にし、生物を標本にすることに等しい。たとえ本当にユーモアのセンスを持っている人でも、売笑を仕事とするなら、その作品はもう読む価値がなくなる。たとえば、マーク・トウェインが言ったように、十八世紀末期以来、ドイツ人がユーモアを好んで話すようになるが、しかし、話せば話すほど離れていく。それは、ドイツ人はソーセージを作る民族であるために、ユーモアもひき肉のようにぎっちり包めば精神的な糧になれると思いをしていたからである。ユーモアは人生の厳しさを軽減してくれるが、自らのことを決して厳しくは見ない。本当のユーモアは我が身を振り返って自ら笑うもので、人生に対してユーモアを以て見るだけではなく、ユーモア自身に対してもユーモアをもって見るのである。ユーモアをスローガンや基準にするのはまさにユーモアが欠如した行動である。それはユーモアではなく、真面目にユーモアを宣伝し、しかつめらしい顔をして我々に笑いを勧めているのだ。また、馬のヒヒインという鳴き声を思い出した。笑い声のように聞こえるが、馬の顔には笑みがちっとも見られないし、おまけに顔が長いから、まるで追悼式の死んだ友人のようであり、また演壇に立つ有名な模範先生のようにもである。

人間は何かに成りすまそうとするときには二つの動機がある。一つは尊敬によるものである。例えば、俗人間が芸術を尊敬する場合、骨董を収集し、上品と風流を装う。もう一つは利用したいからである。たとえば、悪人が何かを企てる時、宗教と道徳を利用し、君子に成りすまします。ユーモアが借り出されたのもこの二つの理由にほかならない。しかし、偽物はしょせん偽物で、本物にはならない。西洋の成語に声を高らかに笑う者を「銀笑」と言う。偽ユーモアは鉛の混じった偽硬貨みたいで重くて濁った音がするから、鉛笑に過ぎない。ところが、「銀笑」は笑いを売り、利益を得ているから、笑いの中に銀の意味があるかもしれない。まるで「書物の中に黄金の家がある」と言っているようなものである。これはあくまでも一説で、辞書編纂者の参考になればと思う。